

先生がいい、後ろの席の琴美がたちあがった。

「キキ、大丈夫？」

琴美が小声でいった。

みんなはぼくのことをキキとよぶ。名前がユキ・キイチロウ。漢字で幸毅一郎。それがちぢまってキキになった。家が同じマンションで、保育園からずっといっしょだった琴美がいいだったんだ。

保健室には山本先生がいた。

「熱はなし。ねぶそく？」

ぼくの額に手をあてて、山本先生がきいた。

ぼくはこくんとうなずいた。

「どうして、ねぶそくになった？」

「はあ……」

口ごもった。

ゆうべはハハの会社の人たちがたくさん来た。ハハはときどき会社の人たちを連れてくる。昨日は五人、会社帰りにやってきて、ぼくと遊んで、ハハと酒を飲んで、泊まっていた。リビングに勝手に寝転がっていた。うるさくてよく眠れなかった。だから今、ぼくは頭が痛くて眠い。

そんなことを話したら、ハハが先生に注意され、ハハは、おしゃべり坊主、といってぼくを叱る。メンドーだ。

ぼくは返事のかわりに顔をこすって大きなあくびをした。

「ま、とにかく寝なさい」

先生はベッドを用意してくれた。

たっぷり眠った。頭痛も治り、気分すっきりして教室にもどった。二時間目が終わったところだった。

「これ書きな」

となりの席のムサシが、さっきの道德の時間の課題だといって作文用紙をくれた。

「何書くの？」

ぼくはむっとなってきいた。作文は大の苦手だ。

「題は『将来の自分の仕事』、社会の仕事について話し合っ、そのあとで書いたんだ」

「なんだよ、それ」

泣きたくなった。

ぼくはまだ、なりたいものが見つかからない。夢中になれるものとか、得意だというものが無いんだ。

鉄道マニアのムサシは新幹線の運転手になるという。まねをしようかと思うけど、乗り物酔いをするぼくは電車が苦手だ。

すすんで保健係になる琴美は、看護師になるという。ぼくも看護師さんは好きだ。なりたいたいと思ったこともある、けれど、看護師さんは女の人の仕事のような気がする。

「書けないや」